

大学1年生女子の物理コンプレックスが大幅に減少

法学部（日吉物理学教室） 教授 小林宏充
こばやしひろみち

大学生の興味や知識は、時代背景も含め変化していきます。これまで日吉キャンパスにおいて10年ごとに、自然科学への興味や科学コンプレックスについて、主に大学1年生へアンケート調査を実施してきました。このたび、理工学部外国語・総合教育教室の池田真弓准教授らと協力し、10年ぶりに調査を実施しました。文系学部生と理工学部生では差があるのか、性別による違いはあるのか、知識獲得媒体に変化はあるのかなど、主に10年前との比較をしました。

科学コンプレックスを感じる時期は、10年前とほぼ変化がありませんでした。文系では、小学校5、6年生から科学コンプレックスをもつ人が増え始め、高1で急増します。理工学部では、高1で倍増しますが、文系ほどではありません。これは、高校になって数学や理科の科目が難しくなることと、それに起因して文系に進路を変更する時期とが重なっているためようです。



物理コンプレックスをもつ人の割合 (文系・理工男女別10年前との比較)

本調査の結果、科学知識を獲得する媒体は、新聞からインターネットへ大転換したことが判明しました。20年前は、新開から6割の学生が科学知識を得ていたのに対して、10年前には4割に、そして今回2割と激減しています。逆に、インターネットからの知識獲得は、今回8割を超えました。テレビからの知識獲得も徐々に減ってきており、今回6割でした。携帯電話でSNSや動画を閲覧する機会が増えていることが要因でしょう。

文系では一般選抜入試において数学を選択した経済学部・商学部の学生は物理コンプレックスが低く、理工学部では化学・生命分野の学門所属の学生で物理コンプレックスが高い傾向にありました。文系・理工、男女問わず物理コンプレックスを感じない割合が増加し、特に理工女性は10年前の1.4倍、文系女性は2.0倍と女性の物理コンプレックスが大幅に減少しています。科学用語に関して、RNAや量子計算機の知識が増加し、特に量子計算機は興味度も増加しました。これらの用語を含むニュースに触れる機会が増えたことが要因でしょう。10年後の調査を今から楽しみにしています。